

主体的に学級づくりに参画する子どもを育てる学級活動（１）

～一人一人の考えを大切にしたい話し合い活動を通して～

要約

近年、急速に加速しているグローバル化、情報化、核家族化によって、社会を取り巻く環境は大きく変化し予測が困難な時代になってきた。このような時代において、多様な他者と協働して集団や生活上の諸問題を解決し、よりよい生活や人間関係を形成する中で、日常の生活を主体的に改善する資質・能力を育成することが重要視されている。新学習指導要領解説「特別活動編」では、多様な他者と協働する集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、集団や自己の生活、人間関係の課題を見出し、合意形成することの重要性が述べられている。これまでの自分自身の指導上の反省として、話し合い活動の前に共同化を十分に行わず、合意形成を図る経験を十分にさせてこなかった。そのため、教師主導の学級会で、子どもにとって目的が希薄な「させられている学級会」になっていた。子ども達にとって、目的が明確でないため、合意形成を図ろうという気持ちにもなっていなかったと言える。そこで、子ども一人一人の考えを大切にしたい話し合い活動を行い、子ども達が主体的に学級づくりに参画する姿を目指して、本主題を設定した。

本研究実践では、次の３点を工夫した。

- ① 一人一人の考えを大切にしたい話し合い活動の工夫
 - ・「互いの考えを知る段階」→「合意形成を図る段階」の２段階の活動の設定（賛成者の比率で集団決定の方法を使い分ける）
- ② 子どもの意欲を高める題材選定
 - ・子どもの願いを表出させ、子どもの「こうなりたい」という願いからの題材選定
- ③ 共同化の場面でのゴール像の明確化、司会者への支援、振り返り活動の充実

実践の結果、次のような成果（○）と課題（●）を得ることができた。

- 話し合い活動の「互いの考えを知る段階」では、板書で考えを整理→異質グループで交流→自分の考えの再整理→全体交流というパターンをつくったことで、短時間で多様な考えを知り自分の考えを強化・修正することができた。
- 話し合い活動の「合意形成を図る段階」では、「全員が納得する」というキーワードのもと、原案に対する賛成者の比率で集団決定の方法を使い分けてきた。これは、全員が納得した集団決定につながり、ひいては一連の活動を通して学級の課題解決に自ら関わりよりよいものにしようとする子どもを育てることにつながった。
- 「題材選定」の場面で、子どもの願いから題材を選定することで、自ら活動に関わっていかうとする子どもを育てることにつながった。
- 「ゴール像の明確化」では、ゴール像を全員で話し合っ決めて。そして、見えるようにしておくことで、子ども達が話し合い活動や実践活動に自ら関わるることができた。
- 「合意形成を図る段階」で、原案に対する賛成者の比率により話し合いのパターンを類型化したが、話し合いの内容によっては別の集団決定の方法があると考え。話し合いの内容に応じた合意形成の図り方を研究したい。

キーワード 全員が納得 集団決定の方法の使い分け

1 主題設定の理由

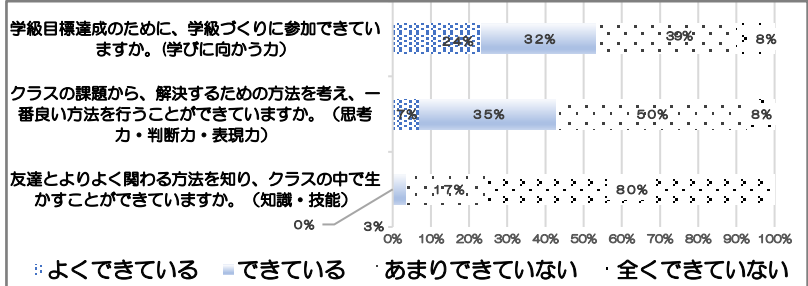
(1) 新学習指導要領解説特別活動編から

- ・グローバル化の進展
- ・社会構造の変化に伴う、予測が困難な時代

多様な他者と協働し、集団や生活上の諸問題を解決し、よりよい生活や人間関係を形成し、日常の生活を主体的に改善しようとする事が重要視。

(2) 子どもの実態から

5月に実態調査アンケートを行った。【資料1】これを見ると、「学級目標達成のために、学級づくりに参加できていますか」という問いに対し、半数の子どもができていないとこたえている。つまり、自ら学びに向かう力が十分でないことが分かる。さらに、学級づくりに必要な思考力・判断力・表現力、知識・技能も十分に身に付いていない。そこで、これらの資質・能力を身に付けさせ、学級をよりよいものにしていこうと自ら関わる子どもを目指していくことにした。



【資料1】学活実態アンケート (5月)

(3) 指導上の反省と子どもの姿から

自分自身の指導上の反省として、これまでの学級会で共同化を十分に行わせず、合意形成を図る経験を十分にさせてこなかった。そのため、教師主導の学級会で、目的が希薄な「させられている学級会」になっていた。子ども達にとって、何のために話し合っているのかが明確になっていないため、合意形成を図ろうという気持ちにもなっていなかったと言える。そこで、目的を明確にした上で子どもの考えを大切にしたい話合い活動を行わせることで、学級の課題解決に自ら関わる子どもを育てたいと考え、本主題を設定した。

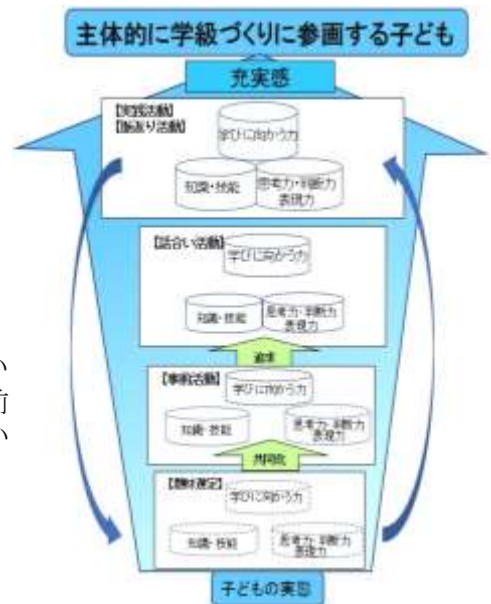
2 主題・副主題の意味

(1) 「主体的に学級づくりに参画する子ども」とは

学級の課題解決に自ら関わり、よりよいものにしていこうとする子どものことである。

そのためには、下記の3つの資質・能力を身に付けさせる必要がある。

- 学級をよりよくしようと、話合い活動や実践活動等に自ら関わろうとする子ども (学びに向かう力)
- 学級の課題を見出し、課題に合った解決方法を考え、自分の考えを整理し、表現できる子ども (思考力・判断力・表現力)
- 学級の課題解決のための話合い活動や実践活動等の知識と技能を身に付けた子ども。 (知識・技能)



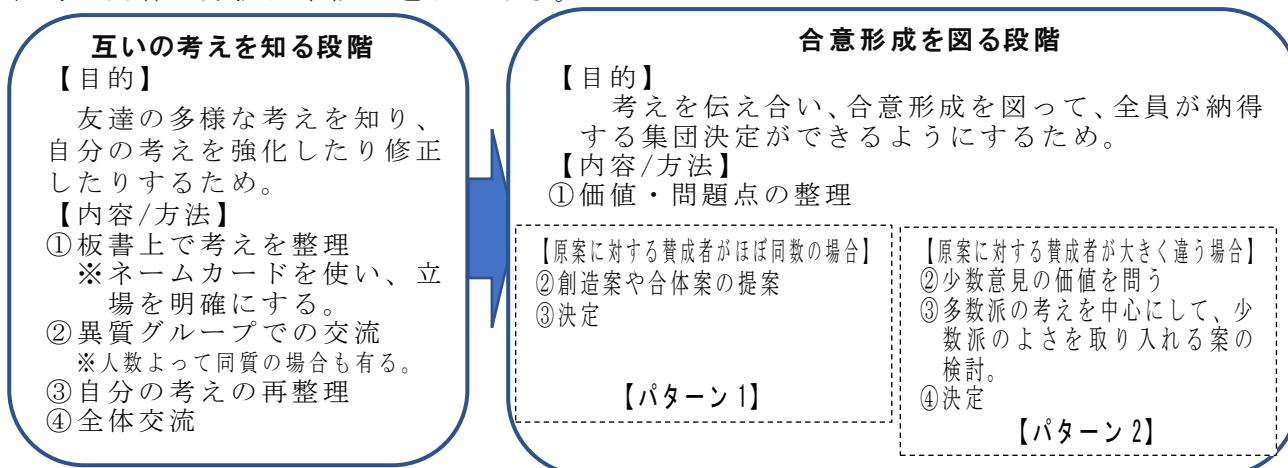
「主体的に学級づくりに参画する子ども」を育てていくためには、【資料2】のように、①題材選定→②事前活動→③話し合い活動→④実践活動/振り返り活動という一連の活動を繰り返すことが大切である。

(2) 「一人一人の考えを大切にしたい話合い活動」とは

互いの考えを伝え合い、合意形成を図りながら、全員が納得する集団決定を行う話し合い活動のことである。

【資料2】主体的に学級づくりに参画する子ども

一人一人の考えを大切にしたい話し合い活動は、【資料 3】のように、二段階の活動で行う。目的・内容・方法は下記の通りである。



【資料 3】一人一人の考えを大切にしたい話し合い活動の目的・内容・方法

このような話し合い活動を行えば、学びに向かう力、思考力・判断力・表現力を発揮し、知識・技能を身に付けながら、一人一人の考えを大切にしたい集団決定ができるようになる。そして、一人一人の考えを大切にしたい実践活動を行うという一連の活動を繰り返すことで、充実感を高め、主体的に学級づくりに参画する子どもを育てることにつながっていく。

3 研究の目標

主体的に学級づくりに参画する子どもを育てるために、学級活動(1)において一人一人の考えを大切にしたい話し合い活動の指導の在り方を究明する。

4 研究の仮説

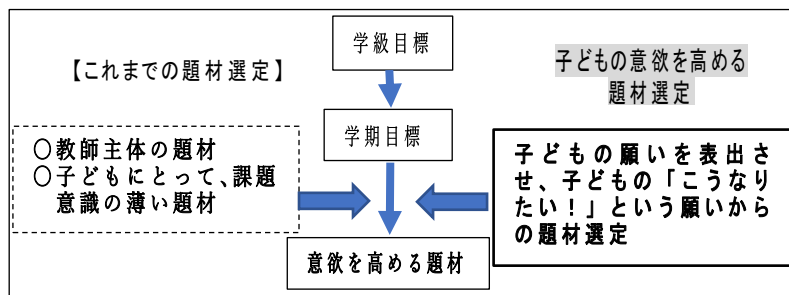
学級活動(1)の学習過程において、子どもの意欲を高める題材を選定し、一人一人の思いを大切にしたい話し合い活動・実践活動・振り返り活動を繰り返し行えば、「学びに向かう力」「思考力・判断力・表現力」「知識・技能」の3つの資質・能力が高まり、主体的に学級づくりに参画する子どもを育てることができるであろう。

5 具体的方策

一人一人の考えを大切にしたい話し合い活動を行うために、次の4つの方策を行う。

(1) 子どもの意欲を高める題材選定

学級目標→学期目標→題材選定の流れで題材を選定するが、その時、子どもの意欲を高めるために、【資料 4】のように、子どもの願いからの題材選定を行う。



【資料 4】子どもの意欲を高める題材選定

(2) ゴール像の明確化

まず、事前活動の段階で学級の課題を明らかにするために、学級全体で課題を共有する。

そして、【資料 5】のように課題をもとに、「〇〇な課題があるから、こんな姿を目指していきたい」とゴール像を明確にしていく。さらにゴール像を可視化することで、一連の活動の中で常にゴール像を意識させる。

【共同化の場面でのゴール像の明確化】

【事前活動】

- 課題をもとにゴール像の共有
- ゴール像を可視化し意識化

【資料 5】ゴール像の明確化

(3) 一人一人の考えを大切にするための司会者への支援

一人一人の考えを大切にしたい司会ができるように、司会者に対して下記【資料 6】のような支援を行う。

段階	目的	支援の工夫
事前活動	一人一人の考えを大切にしたい合意形成を図り、集団決定ができるようにするため。	○ 一人一人の考えを把握・整理するように助言 ○ 話合いの順序の助言
話合い活動		○ 少数派の意見を発表させるよう助言 ○ それぞれの考えのよさや課題を整理するよう助言

【資料 6】一人一人の考えを大切にしたい司会者への支援

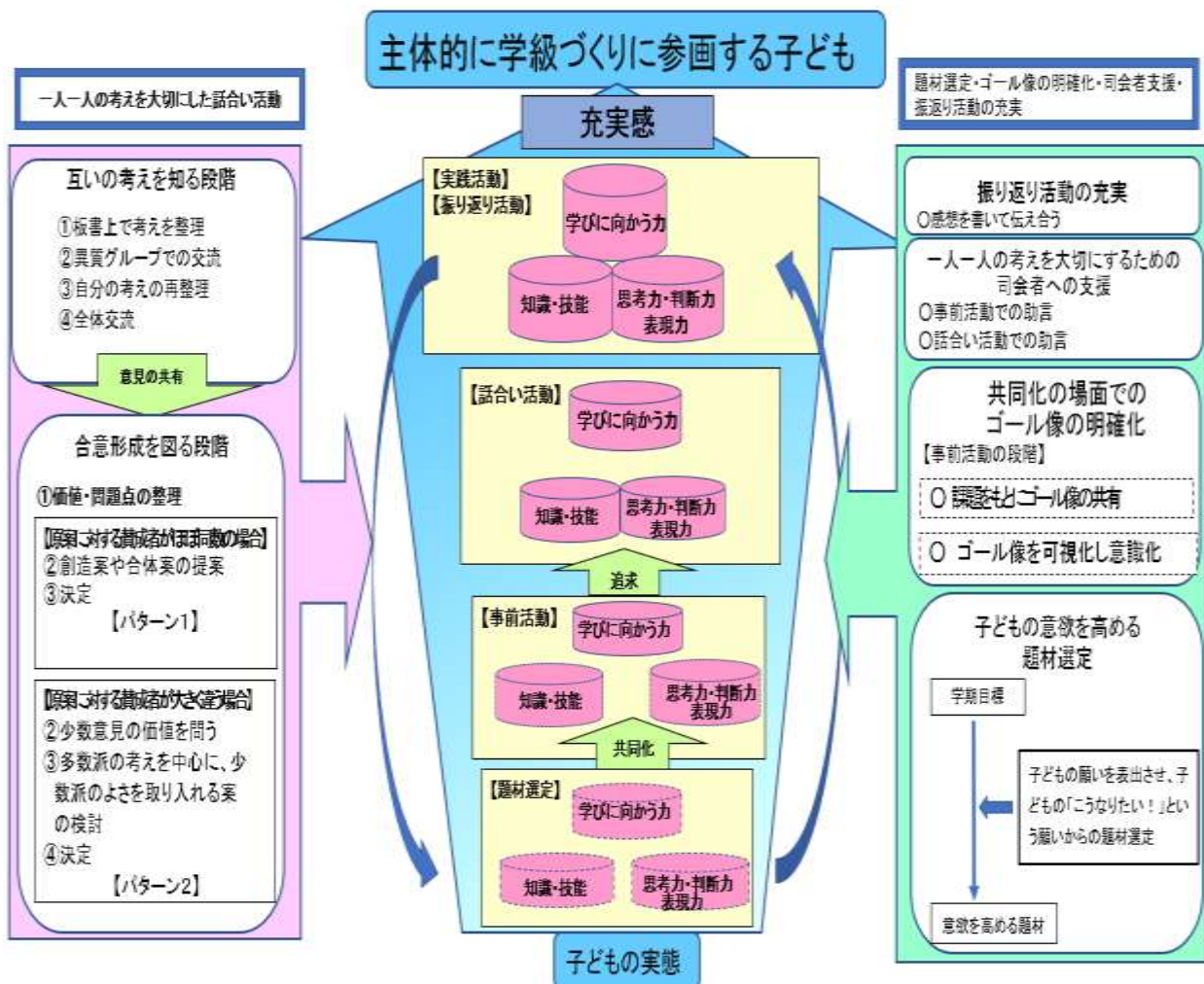
(4) 振り返り活動の充実

テーマに近づいたという充実感を味わわせるために、振り返り活動を位置付ける。目的・内容・方法は、【資料 7】の通りである。

目的	内容・方法
テーマに近づいたという充実感を味わわせるため。	実践活動後、一連の活動の感想を書いて伝え合う。

【資料 7】振り返り活動の工夫

6 研究構想図



(1) 検証授業1 題材「保育園の子ども達から信頼を得る集会をしよう」[1 1月実践]

① 題材の選定

2学期の学級目標は「他学年からの信頼」である。前回の学級活動で、ペア学年の2年生との集会を成功させ、「高学年としてできることが他にもないか」「高学年としてもっと動いていきたい」という気持ちを高めていった。このような子どもの願いをもとに題材を選定した。2月の入学説明会で未就学児と関わる活動があるため、その日に向けて事前に未就学児と仲良くなり安心して2月を迎えられるような活動をすることを目指して「保育園の子ども達から信頼を得る集会をしよう」という題材が選定された。このように、子どもの願いをもとに題材選定を行ったことは、子どもの意欲（学びに向かう力）を高めることにつながった。

② 事前活動1「ゴール像の明確化」

まず、ゴール像の確認を行った。どのような姿が見られたら信頼を得ることができたと言えるのかを出し合った。すると、園児との関わりの中で、園児が困っていたらサポートしたり、たくさんの活動の中で園児と会話をしたりすることで、「5年生ってすごい」「5年生と関わって楽しかった」などと園児から思われることが園児からの信頼につながっていくと確認し合った。「園児と仲良くなり信頼されるような集会をしよう」と、集会の目的を明らかにした。明確化したゴール像は、クラスに掲示し、いつでも子ども達が見ることができるようにした。また、「いきなり集会を行うと園児に寄り添った集会ができない」「まずは園児のことをよく知ることが大切ではないか」という意見が出され、「知り合う」活動を行うことになった。実際に保育園に行き、園児の実態を探る「保育園交流会」を行った。「保育園交流会」を行い、園児との関わりを通して、「園児のために何かしてあげたい」と、さらに意欲を高めることができた。このように、目指すゴール像を明確にし共有したことで、「集会活動に自ら関りたい」「園児のために何かしたい」という思いを強めることができた。また、ゴール像を可視化し、常に意識させたことは、話し合い活動で話し合いの視点がずれずに、目的をもって話し合わせることに繋がった。

③ 事前活動2「試しの活動」「司会者への支援」

保育園交流会後、園児とより仲良くなるために、手つなぎリレーを行うことが決まった。そして、手つなぎリレーの中に「会話がよく生まれる活動」と「サポートが多く生まれそうな活動」を入れることになった。その後、提案者が下記のような原案を提案した。そして、試しの活動【写真1】を行い、それぞれ3つの活動の中から1つを選ぶことになった。

【手つなぎリレーの種目に取り入れたい活動の原案】

- | | |
|--------------|------------------|
| ○会話がよく生まれる活動 | ○サポートが多く生まれそうな活動 |
| ①しりとりキャッチボール | ①平均台 |
| ②クイズ | ②一緒になわとび |
| ③じゃんけん | ③段ボールハイハイ |



【写真1】試しの活動でペアで縄跳びをする様子

その後、【写真 4】のように、ホワイトボードを使って「段ボールハイハイも平均台も取り入れ、どちらか好きな方を園児に選ばせるようにしてはどうか」「安全面に関しては、段ボールと段ボールの間隔を広くし、平均台の横にマットを敷いてはどうか」という考えをA児が出した。「この考えだと、安全面もクリアできるしお互いが納得できる」と、全員納得した上で集団決定を 【写真 4】 合体案をフロアに提案する様子 行うことができた。



このように、「原案に対する賛成者がほぼ同数の場合」は、お互いが納得するための「合体案」を模索していくことで、合意形成を図れることが分かった。学級会後の子ども達の振り返りでも、「〇〇さんが合体案を言ってくれたので納得した」と、納得して合意形成を図れたことがうかがえる。全員が納得して決めることができたため、子ども達は実践への期待感を高めていった。

⑤ 実践活動・振り返り活動

子ども達は、集会に向けて役割分担に従って準備を行い、11月末に「保育園仲良し集会」を行った。

【写真 5・6】のように学級会で決まった平均台渡りや段ボールハイハイ、しりとりキャッチボールを行う際に、園児を気かけたり園児に寄り添ったりしながら会話をしたりする子どもたちの様子が多く見られた。



【写真 5】 段ボールハイハイを行う様子

しりとりで詰まる園児に対しては、ヒントを与えたり園児の速さに合わせて一緒に走ったりと、相手意識をもって活動することができていた。集会後の振り返りの際に、園児から「5年生と一緒に遊んで楽しかった」「いろいろ5年生が知っていてすごいと思った。」などの感想が出された。



【写真 6】 園児に寄り添いながら活動する様子

実践活動後の感想では、【資料 8】のように、「高学年としてサポートや会話ができて、目標を達成できたと思う」と感想を書いている子どもが多くいた。そして

ナオには保育園の子のスピードに合わせてもらった？などの声かけをしながらバナナおにぎりができました。手っ取り早い平均台で、サポートができたし、しりとりキャッチボールでは会話がたくさんできたのでよかったです。遊び終わったら保育園の子が楽しかったと聞いてうれしかったのでよかったです。だから、保育園の子と仲良くなるということがたっせいでできたと思います。次は2月に保育園の子達に学校の案内をしつたりののでその時にむけて準備などを、がんばっていきます。

【資料 8】 実践活動後のB児の感想文

で、感想を伝え合ったことで、「2月の入学説明会に向けて頑張っていきたい」と、次への意欲を高める姿が見られた。このように、ゴール像を明確にした上で話し合い活動を行い、実践活動へとつなげていったことで、自分達の目的が達成できたという充実感を得ることができたと考える。そして、このことが「次の活動でも頑張りたい」と、次の活動への意欲を高めることにもつながった。

(2) 検証授業 2 題材「信頼につながる帰りの会を見直そう」[12月実践]

① 題材の選定

11月末に学級力アンケートを行った。その結果から、「尊重」の項目が低いことが分かった。このことについて子ども達と話し合うと、相手を大切にしない言動や行動が多いことが明らかになった。そして、「もっと仲間と認め合い信頼し合いたい」「悪口ばかりではなく励まし合いたい」という気持ちを高めていった。その後、帰りの会のスピーチ活動の際に、「自分のことを発信している内容を仲間のことを発信する内容に変えたらどうか」という意見が出された。そして、友達のことを発信すれば友達のよさに気付いたり違いを認めたりすることになるのではないかという考えに至り、題材が選定された。この題材においても、子どもの願いから題材を選定したことで、自ら活動に関わっていこうとする子どもを育てることにつながるということが分かった。

② 事前活動 「ゴール像の明確化」「司会者への支援」

まず、ゴール像の明確化を行った。「友達のよさや影での努力、頑張りを知ることが、〇〇さんってすごい！」とよさを認め、「そんなことがあったとは知らなかった。〇〇さんへの見方が変わったな」と違いを認めることになるという意見が出た。そして、「友達のよさや違いを認め励まし合えるようなスピーチ活動にしよう」というゴール像を明確にした。そして、スピーチ活動をすることが尊重の改善につながり、信頼し合える関係づくりになることを共通理解した。【資料9】

子ども達は、ゴール像を明確にすることで「どのようにしたら課題が解決できるだろうか」と、課題に合ったよりよい解決方法を考え、取組への意欲を高めていった。

司会者と副司会が、よさと課題を表に整理し、それぞれのよさは目的に合っているか、課題はどうしたら解決できるかを自ら考えていった。会の進め方に関する知識・技能が高まってきたことがうかがえる。教師は、合意形成を図る段階での考えを決定する順序を助言した。今回の



【資料9】可視化されたゴール像(教室掲示)

学級会は、数に大きくばらつきが見られたため、少数意見のよさにも目を向けることを助言した。このことは、一人一人の考えを大切に合意形成を図る活動につながった。

③ 話し合い活動 議題「帰りの会のスピーチの方法を決めよう」[12月]

【互いの考えを知る段階】

話し合い活動では、クラスみんなでよさや違いを認め励まし合えるように、どんな方法でスピーチを行うかを話し合った。原案は下記の通りである。

- | | |
|---|--|
| A | 事前にくじを引いて、当たった人のよさや影での頑張り等を日直が発信する。
よさ…事前を考えておくことができる。全員当たる。
課題…自由に言えない。 |
| B | 日直が前もって考えた人のよさや影での頑張り等を発信する。
よさ…自由に言える。
課題…偏りが出る。 |

- C 隣の人のよさや影での頑張り等を紙に書いて、隣同士で読み上げて発信する。
よさ…恥ずかしくない。言いやすい。
課題…全員のよさを知れない。
- D ボックスに友達によさや影での頑張り等を書いた紙を自由に入れ、帰りの会に日直が引き二名分読み上げる。
よさ…無記名だと恥ずかしくない。
課題…偏りが出る。全員のよさを知れない。見つけようとしなない人が出る。

まず、よさと課題を事前に板書上に整理した。前回同様、自分の立場が分かるようにネームカードを黒板に貼ったが、Aに賛成した子どもが多かったため、グループ交流は、同質グループでも行ってよいことにした。グループ交流の際に意見が変わった子どもは、ネームカードを移動して全体交流を行った。この時点で、AとBに絞られた。Aが大多数、Bが3名となった。

【合意形成を図る段階】

まず、司会がAとBの価値と課題を発表させた。Aの「事前にくじを引いて発信」は、「全員が発表されることで全員の友達のことを知ることができる。だから、目的の達成につながる。」「事前に考えておくことができるので、たくさん友達のことを発信できる。」という価値が出された。そこで、[パターン2：原案に対する賛成者が大きく違う場合]による収束を行った。教師が、「少数意見のよさを取り入れる考えを探ってみてはどうか」と助言をした。司会が【写真7】のように、それぞれのよさを再確認し、「Aの考えでいきつつ、Bのよさも取り入れることはできないか」と発言した。A派の子どもが、「くじを引いて発信はするけれど、どうしても発信したい子どもがいたらその友達の分も自由に発信できるようにしてはどうか」と発言し、合意形成を図ることができた。このように、「原案に対する賛成者が大きく違う場合」の話合いにおいては、多数派の考えを中心にし



【写真7】司会者が意見を整理する様子

て、少数派のよさを取り入れると合意形成を図れることが分かった。少数派に賛成だった子ども達の振り返りを見ると、「自分の意見も取り入れられたので、納得してAに賛成できた。スピーチを頑張りたい」と書いている。自分の考えが大切にされたことで、実践活動に向けての意欲を高めることができた。

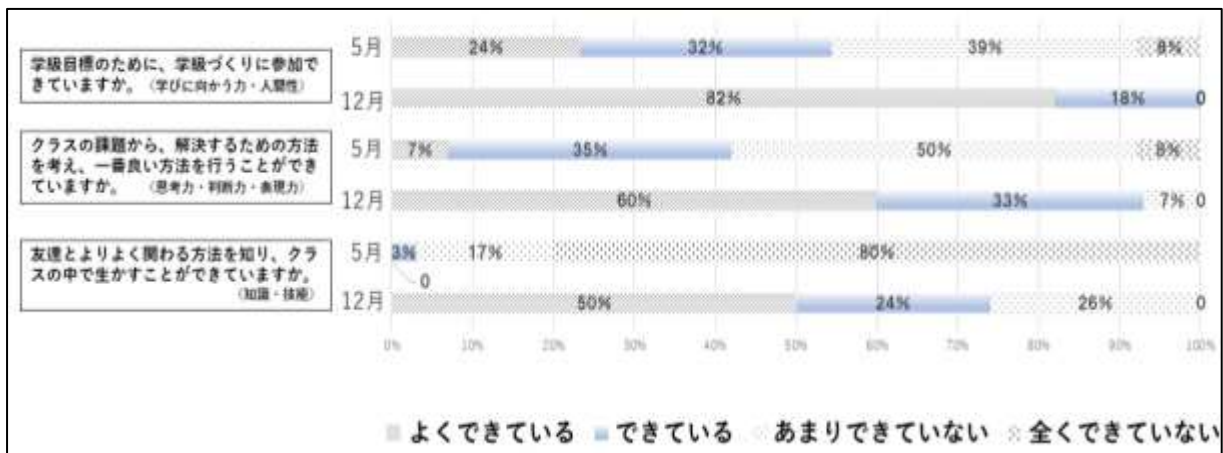
④ 実践活動・振り返り活動

次の週の月曜日から実践活動を行った。あまり関わってこなかった友達のことを紹介するために、その友達によさや努力を探す姿が見られた。スピーチの場面では、「自分は発表や勉強ができない。でも〇〇君にいつも教えてもらって感謝している。〇〇君のようにになりたい。」等のスピーチが見られた。そして、これだけで終わらず、スピーチを聞いた女の子が、「〇〇さんは、そのままの〇〇さんでいいやん。」と、スピーチをした子どもを認める姿が見られてきており、一日の終わりを温かい雰囲気の中で終わることができるようになってきた。取組後の子ども達は、「普段なかなか見つけられない友達によさや頑張りを見つけようとして、みんなに発信することができた。」「恥ずかしかつ

たけれど、友達が嬉しそうに聞いてくれてよかった。また見付けていきたい。」など、充実感を味わっていた。この題材においても、ゴール像を明確にして合意形成を図る話し合い活動を行ったことが、主体的に学級づくりに参画する子どもを育てることにつながったと言える。

8 実践前（5月）と実践後（12月）のアンケートの比較

【資料 10】のアンケート結果から、3つの資質・能力が高まったと感じている子どもが増えたことが分かる。これらの資質・能力の高まりが、自らよりよい学級づくりに参画する子どもの育成につながったと考える。



【資料 10】 実践前（5月）と実践後（12月）のアンケート

9 成果と課題（成果○課題●）

- 話し合い活動の「互いの考えを知る段階」では、板書で考えを整理→異質グループで交流→自分の考えの再整理→全体交流というパターンをつくったことで、短時間で多様な考えを知り自分の考えを強化・修正することができた。
- 話し合い活動の「合意形成を図る段階」では、「全員が納得する」というキーワードのもと、原案に対する賛成者の比率で集団決定の方法を使い分けてきた。これは、全員が納得した集団決定につながり、ひいては一連の活動を通して学級の課題解決に自ら関わりよりよいものにしようとする子どもを育てることにつながった。
- 「題材選定」の場面で、子どもの願いから題材を選定することで、自ら活動に関わっていこうとする子どもを育てることにつながった。
- 「ゴール像の明確化」では、ゴール像を全員で話し合って決める。そして、見えるようにしておくことで、子ども達が話し合い活動や実践活動に自らかかわることができた。
- 「合意形成を図る段階」で、原案に対する賛成者の比率により話し合いのパターンを類型化したが、話し合いの内容によっては別の集団決定の方法があると考えられる。話し合いの内容に応じた合意形成の図り方を研究したい。

〈参考文献〉

- ・文部科学省 「小学校学習指導要領解説 特別活動編」
- ・新学習指導要領の展開 特別活動編 杉田洋編著